

僕は個人的にツイッターという空間は作法もわかりませんし、距離を置いておりました。その空間で『法学セミナー』での論考が厳しい攻撃に合いました。学者として、まっとうな攻撃には(紙面や学会の場などを通じて)反論をと思うのですが、正直言っておそらく多くのツイッターでのコメントはそれに妥当するようには思えませんでした。なので、どう反応していいのかわからず、真剣に悩みこの文章を掲載することにしました。

僕の反論というか、お願いは、『法学セミナー』の論考を最初から読んでほしいということに尽きます。僕の論考全体を読んでくださったのか多くのコメントに対して疑問符がつきます。繰り返しになって恐縮ですが、何かコメントをするならば論考は全体を読んでほしいです。こちら、この原稿に対しては数か月をかけ、校正でどこに句読点を打つかまで悩んだ過程で出てきた文章だということを踏まえて解釈をしていただきたいです。なお、この騒動の発端になった[ツイッターでのご紹介をいただいた国際法の先生](#)に多湖は深く感謝しております。僕の自衛権発動件数に関する認識不足を正していただき、とても勉強になりましたし、そこから新しい問いを僕は見出せました。自衛権発動通報をめぐる政治学研究はまだやることがあるように思います。

さて、多湖の論考における「おまけ」の主張は、国際共通言語である英語で生産しないと国際政治学の世界水準ではない、そして、そういった(定性だろうが定量だろうが方法は問わず)英語の世界水準の国際政治学を知ってほしいという点にありました。ここであえて「おまけ」としましたが、著者的にはそうではなく、主軸の主張だといっても構いません。そして、専門外のテーマに言及しがちな、本来評論家と称すべき「国際政治学者」の論考に目を向けるのは避けてほしいという指摘もしました(これは、確かに「おまけ」です)。多湖は妻の里紗に、たびたび「日本語できないよね」と言われますので、文章表現において稚拙であったかもしれません。句読点の打ち間違いもあったかもしれません。ともあれ、結果としてみなさまに不快な思いをさせる余地を十分検討しなかった点について素直にお詫びしたいと思います。

他方、みなさまのツイッターでのご議論は、多湖の文章からはかなり跳躍し、書かれた文章をどう曲解すればそうなるのだろうかとても不思議な思いで眺めるものもありました。残念ながら僕はツイッターをしないため、反論または対話の機会をどう設けるのかを考えていた際、神戸大学の[木村先生がFacebookにて同問題をあげてくださり](#)、やっと僕からの発信がかないましたが、そこまでの時間は友人から色々ツイッターで炎上しているよとその様子を教えられ、目にするだけで、とてもやるせない思いでした(正直、悲しい気持ちでこの週末はかなり暗い気持ちでした)。こんな思いをするのであれば、僕は日本語では発表をしないほうが幸せだったなと思いましたし、今後は英語の世界だけで世界の国際政治学者と対話しようと感じています(その意味で、法学セミナーのような問題は今後は起きません)。

僕はこの論考の冒頭から、「日本の研究者も英語で論文を書かねばひとりごと」という主張はしており、それについては論争が出てほしいと思っておりました(なお、それには議論の余地があり、たくさん意見が出てくるいいと思っております＝ここをどう工夫して学会を良くしていくのかが国際政治学会にせよ、国際法学会にせよ大事な論点になる気がしております)。

僕は、地域研究や外交史が国際政治学ではないといった解釈が生まれうる文は書いていませんし、専門家が専門分野に即した意見・見解を述べることを否定しているとは読めない日本語を記述したつもりです(もちろん、僕の日本語力はその意図伝達でも失敗しているかもしれません)。ともあれ、なぜここまで曲解されるのか、とても困惑しております。

ただし、これも僕が日本語で研究をしてこなかったことの「つけ」なのだと感じます。結果としてこういったハレーションを引き起こしたのは自分の書いたものです。そして自分の書いたものが起こした結果に責任を持つのが著者だと感じます。その意味で、みなさまにこういった不快なプロセスを生み出す発端を生んでしまったこと、深くお詫び申し上げます。また、法学セミナーという媒体がそういった場になったことで、出版社のみなさまにご迷惑をおかけしたこと、重ねてお詫びします。

最後にお願ひです。僕が書いた論考に文句がある場合、SNSではなく、多湖までメールをください(僕のメールは上記にもありますが、Google Scholarで公開されています)。公開の場でパネルを組んで議論をやりましょう。僕はそういう場には出て参ります(日本政治学会のイズムのセッションもそういったものだったと思います)。ともあれ、SNSにおける今回の議論の様子を見ても、僕が時間を費やす空間ではないなと感じました。この文章を最後に、コメントを読むのもやめたいと思います。そして、僕は自分のやるべき次の論文執筆の作業に戻ろうと思います。